別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　藍 弘岳

本論文「荻生徂徠の詩文論と儒学――「武国」における「文」の探求と創出」は、徳川日本の１７世紀後半から１８世紀初期の思想家・荻生徂徠（1666-1728）が、武家の国家において「文」の秩序を作り上げようとする在り様を、その学問の幅広い形成過程から追求する論文である。徂徠による詩文・漢文などの「文」学は、古文辞学および翻訳論を重要な契機とし、規範・制度となる「文」（礼楽）をもとらえる。その動きは、武国たる日本を越え、明代さらに古代中国への探求であり、本論文はその様相を具体的に描き出してゆく。従来の研究では、徂徠の思想内容について、結局、その詩文と政治秩序とをただ分離させ、また「日本化」あるいは「近代化」という枠組でとらえる傾向があった。これに対して本論文は、徂徠が「文」の秩序を東アジア的広がりにおいて構成（創出）していくとし、その局面における個々の探求の動きを関係づけながら追求していく。以下、次のように論を展開する。

序章では、従来の徂徠論では、個別論はともかく視野・方法としては、専ら日本だけに止まり、そこで近代化をとらえており、またその言語論も同様に不十分であった。しかし、徂徠の言語論は、大きな東アジアの漢文学史の視野において、武国での文をめぐって形成され、そこに文体（古文辞）また規範（礼楽）としての「文」が創出される。ここに踏み込んで行くことが必要だと説く。

この問題意識と方向付けから、第一部「武国における「文」の受容・展開と初期徂徠」では、まず初期徂徠学の在り方をとらえる。徂徠には、大きな近世的背景として、武国における「文武両道」さらに「文」優位の流れがあった。徂徠はこれに棹さしている、という（第一章「武国と「文」――徂徠以前において」）。また、初期の徂徠は、医学・兵学を論じる。それらは、後の徂徠学に無関係な学問あるいは「武威」論なのではなく、活物的・生命論的な自然観から養うべき天人の分の強調なのだとし、その具体的な様相をとらえる（第二章「武国における荻生徂徠の家系と初期思想――医学・兵学」）。論者は、ここに徂徠のいわば有機的な自然観・存在論を捉えんとする。

第二部「漢詩文としての「文」の探求と創出」では、所謂「徂徠学」が構成されるテキストにさらに入っていく。その際、徂徠がかなり深く関与したが、しかし従来は軽視されることもあった明代古文辞学の中身を深くとらえていく。李攀龍・王世貞など個々の思想家の在り方を具体的に把握し、それが宋学流の「理」の重視ではなく、より風雅な格調・

修辞の模倣・習熟であるとし、その学問的な状態と影響を指摘する（第三章「明代古文辞派の「宋学」批判と詩文論――李攀龍と王世貞」）。他方これはまた徂徠において方法としての翻訳論としても展開している。徂徠は、当時の「訓読」は日中のまた史的な言語の差異に無自覚であるとし、これを乗り越えるものとして「訳学」「看書」を説く（第四章「徂徠の「訓読」批判と翻訳方法論」）。その際、徂徠は、明代古文辞学派に深く関与することから、東アジアにおける華やかで美しい「文の空間」を強調し自負することになった、という（第五章「徂徠の詩文論」）。この徂徠における「古文辞学」が、さらに深化することから「六経」を史・文とみなす「古言」の世界を発見し、これが徂徠の「弁名」論、「聖人の道」の再構築となった（第六章「学問方法論としての古文辞学――経書解釈方法・『弁名』方法の創出」）。

以上の第一部・第二部から、「徂徠学」がとらえる制度・秩序の内容をさらに把握したのが「第三部 規範・制度としての「文」の探求と創出」である。ここでは、徂徠の儒学説が、「文」としての「聖人の道」であり、敬天・安民から、封建において作為・養育される、風雅――「美」的なまた「仁」たる詩書礼楽の形態――としてとらえられる。ただ、この三代に成立する理想的形態は、歴史的には衰えながら当代・日本に至る、と徂徠はとらえる（第七章「荻生徂徠の儒学説とその歴史認識」）。その歴史・地域認識から、振り返って、徂徠自身の現実認識と政治改革論が説かれる（第八章「荻生徂徠の現実認識と政治改革論――制度と「徳」」）。その内容は、制度論、土着・身分制また人材論などとして展開する。これらの内容を論者は追い、徂徠は、政治と宗教を関連させ、天・鬼神への敬に基づく祭政一致を説いているが、これを変容するところに後の近代天皇制に繋がる政治思想史があるのではないか、と最後に問題提起する（結論）。

本論文は、従来の徂徠研究では、大きくは、その詩文論と礼楽刑政論が分化されてしまう傾向があったのに対し、これを結び付け、古文辞学における徂徠学の形成をとらえる。そこには、「武国」における「文」の探求があり、内容として風雅（美）また仁などの徳を持つ秩序が探求され、それが東アジア的な詩文論・儒学説・歴史観からの創出であった、とする。このような把握は、従来、文学と政治とを分離させまた日本内部のみに収斂し勝ちであった思想史を、徂徠自身を辿ることで大きく東アジア思想においてとらえたものといえる。この点は、徂徠論あるいは徳川思想史において意義あるだけでなく、近世以後の大きな地域文化論としても高く評価できよう。

具体的な個別研究としても、かつて十分にとらえられていなかった、医学さらに古文辞学派たちの動きを始めとする諸テキストに深く踏み込んでおり、このことも研究として意義が大きい。また、徂徠の秩序論は、徳川期の東アジア的な広がりにおいてあるが、その活物観・歴史観は、やがて近代に向けて国学・後期水戸学・近代天皇制へと否定的な連関を生じることも示唆されている。徂徠をめぐる諸思想が、東アジア思想の近世・近代にどうなるのか、本論文は大きな問題提起をしている。

とはいえ、「徂徠学」は、「言語」をめぐる方法論あるいは「古文辞学」としてあっただ

けではない。当初から「経学」の側面をもち、「聖人の道」「六経」の解読にむかう方向性をもつ。そこでは「今言」に対する「古言」の把握が展開する。これらについて本論文は、触れてはいるが、古文辞学を中心にするが故に、その段階的な把握が十分ではない。また、徂徠自身において、彼の人生における経験と年代的な発展があり、それが五十代以後の徂徠学になる。これらを位置づけていくことも必要だろう。また徂徠の制度論が、彼の現実との関係において、その成敗はどうだったのか。この理論と現実との緊張関係もやはり問題になり、それはまた徂徠以後の政治思想史にも繋がる。翻って徂徠以前の山鹿素行・伊藤仁斎、伊藤東涯などとの関連もより十分に捉える必要がある。また背景たる活物・神妙不測観が一体何なのかもより把握すべきだろう。

とはいえ、本論文は、荻生徂徠の言語に立ち入りながら、そこにおける「文」がいかに彼の学問と秩序観を形成したかを、しかも東アジア的視野にも踏み込んでとらえた労作である。各々の分析は、膨大な研究・史料を踏まえて行われており、筆者の研鑽がきわめて深く広く展開している。この徂徠における東アジア関係と言語認識は、おそらく徂徠のみならず徂徠以前・以後についても、今後の研究に大きな示唆を与えるだろう。本論文は、従来十分ではなかった徂徠学の諸局面に踏み込み、徂徠学の形成を、その詩文・漢文の言語がさらにその政治的な展開にまで結合していく状態を深くとらえており、この研究はこれまでにない極めて創造的な仕事だといえる。このような点から、審査委員会は、本論文は、当該研究分野において画期的な地平を開くものであり、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定する。

別紙 ３

最 終 試 験 の 結 果 の 要 旨

論文提出者氏名　藍 弘岳

本審査委員会は、平成２０年４月２５日に論文提出者に対し、学位請求論文の内容および専攻分野に関する学識について口頭による試験を行った。

その結果、論文提出者は博士（学術）の学位を受けるにふさわしい十分な学識を有するものと認め、審査委員全員により合格と判定した。